# 敵対的なものとしての政治論の系譜

## －シャンタル・ムフの「政治的なるもの」の概念－

平田　忠輔

## Chantal Mouffe's Conncept of The Political

HIRATA Tadasuke

**Abstract**

The aim of this paper is to envisage Chantal Mouffe's theory of politics. Her theory consists of "the political" and theory of discourse. This paper, in especial, addresses the concept of the "the political." On "the political" she refers to Carl Schmitt and said we need to "think with Schmitt, against Schmitt", by which is meant "to use his insights in order to strength liberal democracy against his critique."

According to her to strength liberal democracy, we should the concept of "the political", because the social always involves conflictual moments. What political theories need is not to negate or preclude these moments —— like the liberal theories, but to transform Schmittian way of solution. Schmitt solves these conflictual moments only an antagonistic, or friend－enemy way. Instead, democratic politic could employs an agonistic way. And this is the key task of conflictual plurarism and radical democracy.

キーワード：政治的なるもの　政治　言説　敵対的　闘争的　カール・シュミット

Key words：the political, politics, discourse, antagonistic, agonistic, Carl Schmitt

### 一

政治あるいは政治的なものの縮小や消滅、あるいは排除さえ指摘されている。それには理論的にもいくつもの理由が上げられている。例えば、シーダ・スコッチポルは近著でも市民社会論が政治論との結びつきを希薄にしたことを指摘する（註１）。あるいは、政治の縮小を経済的領域や市場の拡大の結果に求め、政治の領域が経済に侵蝕されていることも指摘される。他方、経済の領域の拡大は、ヘゲモニー的な言説であるグローバル化やネオ・リベラリズムによって説明される（註２）。例えばテッサ・モーリス・スズキはいわゆる「民営化」の意味を「公」と「私」の再構成という点から取り上げ、次のように批判する。民営化の過程は多くの領域を市場原理による概念へと再編成するが、それは国家権力の縮小を意味するものではなく、他方、生活を「民主的な議論や実践から巧妙に遠ざけ」る（スズキ 2004, 180)。「国家そのものは「民営化」された領域に深く関与しつづける。したがって、「民営化」によってなされた国家と企業の権力の拡大は、民主的な議論や実践の対象とならなくなっている」（スズキ 2004, 166)。

山梨県立大学 国際政策学部　総合政策学科

Department of Glocal Policy Administration, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

政治論的に問うべきは、例えばイラク戦争に見られるように、「財やサービスの供給の担い手が国家やコミュニティから民間企業に移管されたという意味での、「民営化」や「商品化」現象の単なる過程ではない。…これまで「公」と「私」とに区分されきた領域が、その機能の複合的絡み合いによって新しい領域を創造してきたことを呈示している」ということである（スズキ 2004, 121）。

アンドリュー・ギャンブルの終焉論批判も政治の縮小の文脈で取り上げることができる。彼は、「われわれのこの時代の運命は、グローバル化とテクノロジーに発する巨大な非人間的諸力のつくりあげた鉄の檻、反政治的であると同時に非政治的でもある社会、もう一つの未来を想像したり推進したりする希望や手段のない社会に生きることである」（ギャンブル 2002, vi）と述べている。彼は、政治の三次元、すなわち「権力としての政治」・「アイデンティティとしての政治」・「秩序としての政治」を区別し、「アイデンティティとしての政治」について次のように指摘する。「それは個々人の格闘が演じられる背景の一部なのである。政治理論家の中には、敵と味方を規定することこそが政治の本質だとする者があるが、それは政治が君は誰か、君は何を支持しているのかを語り、君の利益と信条を守って活動を起こす姿勢を示しているからである。敵と味方がいなければ政治は行き所がなくなってしまうだろう。対立と真剣な論争がなかったら、誰が公職についたか、その政策は何だったのかの争点は些細な問題となってしまう」と。対立を生み出すアイデンティティには多様なものがあるが、国民国家、宗教、エスニシティ、ジェンダーは「依然としてアイデンティティの重大な源としての位置をしめている」と問題の所在を指摘する（ギャンブル 2002, 142－143）。

ギャンブルの指摘は、社会的なものが形成される際に必然的に孕まれる裂け目、あるいは裂け目がもたらす敵対や闘争はどのように捉えられるべきかという重要な問いである。したがって敵対する勢力同士はどのように表象/代表（representation）されるべきか。敵対や闘争は、例えば社会的再分配に関連して、あるいはアイデンティティと差異をめぐる問題で、すなわち、社会的分裂の承認と紛争の正統化によって顕わになる。この闘争にいかに対処するか、その闘争を適切に扱うことのできる政治空間をいかに形成するか。こう問うと、政治離れは単に政策的対応の失敗や政治不信から生じているのではなく、政治がわれわれの生とどのように関わるかという問いに十分答えていないことから生じているのが分かる。したがって、こう言えば明確だろうが、闘争や敵対は、なんらかの政策で解消できるような、「格差」のために生じるのではない。問われているのは、政治体制のあり方、われわれの生のあり方に基づく政治空間はいかに形成できるのかということである。それが実践的問いであるとすれば、われわれには何ができるのか応えなければならない（註３）。

したがって、実際の政策よりも、政治を縮減してしまった責任は政治理論にあるのではないか。そのことの方が深刻なのかもしれない。この点でボニー・ホーニッグも政治理論に「政治の追放（displacement）」という事態が起きていると重要な指摘を行っている。彼女は『政治理論と政治の追放』でジョン・ロールズとハンナ・アーレントを軸に政治理論を検討する。合意を重視するロールズはさておき、政治空間を閉じるような理論に反対するアーレントは注目すべき論点を含んでいる。

周知のようにアーレントは権力と暴力の区別を執拗に強調し、権力が欠如したとき暴力が用いられると述べた。この見方は、支配としての政治とは別の政治観を作り出したといってよい（註４）。暴力は政治空間が持つべき開けを閉鎖してしまうからだ。これも周知のことだが、アーレントによって、人間の活動（activity, vita activa）は労働（labor）・仕事（work）・行為（action）と三区別され、政治は行為によってもたらされる開けの空間であるとされた。なぜなら、「私的領域での行動（behavior）と違って、政治的行為は、その意味を行為者の意図、動機あるいは目標から引き出すのではない。意図、動機、目標、そればかりかエイジェンシーそれ自身が行為の原因である」。意図や目標に目を向けるのは、「行為を道具化することである」。それは「あらかじめの、特権化

された意味の源泉の表現」と見なすことである（Honig 1993, 78)。道具的な行為と違って、政治空間は「行為の革新的そして創設的（innovative and initiating）力」によってのみ形成される（ibid）からである。

ホーニッグはアーレントのそれを政治の*virtù*理論とし、virtue 理論と区別し、次のように特徴づける。「民主的政治を徴づける裂け目と不確かさは、政治の virtue よりも*virtù*と共鳴させる。民主主義ということで、代議制制度を正統化する実践を生み出すだけでなく、永続的に人民（ローカルなまたグローバルな）の政治的行為を生み出す一連の制度を意味するなら、政治の裂け目を封じ込めるか追放することが可能であり望ましいという virtue 論の前提は、反民主主義的共鳴をもっている。virtue 理論は、政治を官僚的行政、司法的支配、共同体の強化に置き換えるので、政治を民主的抗争の範囲から取り除く傾向がある」（Honig 1993, 4)。

アーレントを*virtù*論者というのは、彼女によって*virtù*とは「新しい体制の創設の能力、政治権力の誕生、その維持と再生のための制度的条件の設置」とされ、「政治的創設の卓越性（excellence)」（傍点－原文イタリック）と賞賛されるからである（Honig 1993, 4）が、それにも拘わらず、その言語行為を検討すると、アーレントがある種の安定性を求めていることが見て取れる。ホーニッグによれば、アーレントは非日常的言語行為に誇りを与えながらも、「アーレント的行為は、家（home）と呼ぶべき場所をもっている。この場所は（すくなくとも概念上は）不断に存在するが、いまや家政の領域によって提示された外化された脅威からは安全である場であり、暴力、過程、通常性（日常性)、存在と繰り返しの脅威、肉体によって急き立てられる、不可抗な必要性、「直接の同定可能な必要と欲求」の沈黙の、指示的なコミュニケーションの脅威からは安全な場である。…アーレントは、行為遂行性と不適格性やリスクとの強い結びつきを断言することによって、他者性から政治を保護する。しかしながら、そうすることにおいて、彼女はオースティンと同じように、言語のために家を、デリダなら本質あるいはテロスによって庇護されたと言うであろう、場を据える」（Honig 1993, 94。傍点－原文イタリック)。

アーレントの抗争としての政治観では、その点はどうなのか。抗争的側面はしばしば政治のアゴーン的側面として指摘されている。アーレントによれば、われわれが目にしているのは、「近代官僚制、行政的政治と正常化の時代、システムの時代における政治の追放」であり、「真の政治の徴は、抵抗可能性と再－建設の可能性への永続的な開けである」である。それが*virtù*たる所以である。「過剰な秩序は争いの可能な空間、政治の空間を閉ざす」からである。アーレントは、このような閉鎖から、すなわち「一つの観念、真理、本質、個人、制度による支配から守ろうとする」。そこでアゴーンを賞賛するのである（Honig 1993, 116)。

しかし、アーレント論ではしばしば指摘されることだが、「妥協のない私的－公的の区分が、社会的正義の問題の政治化を防ぐことによって、政治の領域特有性（sui generis）を保護した」点を考慮に入れなければならないと、ホーニッグも言う。すなわち、「人種、ジェンダー、エスニシティ、宗教にかかわる問題は政治から締め出される。アーレントの評価では、それらは、そもそも偉大な（virtuosic）行為の内容ではなく、私的領域の特徴、すなわち人類（人間存在）それ自体の自然的、本質的、模倣できる特徴である」（Honig 1993, 118)。「神、資本、テクノロジー、ジェンダー、人種、階級、エスニシティ ── そのいずれもがアーレントの政治によっては論じ（touch）られていない」。こうして、ホーニッグは、「アーレントの政治ヴィジョンは縮減されているように見える」（ibid）と指摘する。「アーレントが、私的領域の信頼性、単一性、日常性を行為や政治の亀裂から守ろうとしたのも同じように重要である」。家という比喩を再び用いれば、アーレントは「行動（behavior）だけでなく、行為も飼い慣らす。彼女は、行為に家と呼ぶべき場を与え、…そこに留まるよう告げる」（Honig 1993, 120　註5)。

ホーニッグのアーレント評価を通じて、現代の政治論の理論的課題、すなわち他者の言語、公/

私の区別、それらに通底するわれわれ/彼らが依然として問われるべきことが確認できる。したがって問わなければならないのは、一方でアーレント理論が提示した〈開かれた政治空間〉を創出し続け、他方アーレントが躓いた問題、すなわちホーニッグがアーレントの「家」── 安定性を保証され、庇護された領域 ── と呼んだ領域にどのように対応するのか、である。その課題のためにはどのような理論が必要なのか。その点を本稿ではシャンタル・ムフ論として検討しようと思う。ムフの理論は、一方では「縫合（suture）」された社会という観念を拒み、他方、政治の本質を友・敵という二項対立とした「政治的なるもの」が強調される。「政治的なるもの」の考察は、「シュミットとともに思考することによって、シュミットに抵抗していく」（Mouffe 1993, 2）ことであり、それを通じてアゴーン的民主主義論を論拠づけようとする。

しかし、ムフは首尾よくシュミットに出会ったのか、その結果どのような政治論が生まれるのか。それは本稿全体の課題であるが、さしあたって次のように言っておこう。ムフは、「紛争と敵対関係は、民主主義の完全な実現のための可能性の条件であると同時に、また不可能性の条件でもある」（Mouffe 1993, 16）と言うが、そのとき、彼女は、カール・シュミットを援用して、「平等主義的デモクラシー理論と多元主義的差異のあいだには分離不可能な緊張」があり、「この緊張は解決できないまま、政治的領域は頑強に決定不可能に留まり、飼い慣らせない反対者の空間が維持される」ことを確認するのである（Smith 1998, 128）。この点はまさに差異と統一の近代的把握にもかかわっているが、「ムフの観点では、市民は、自由と平等の原理のラディカル・デモクラシーの解釈との集団的同一化によって結束されるべきである。というのは、近代社会で差異を束ねるのは、民主主義的伝統であるからである」（Smith 1998, 135）。

この観点からすれば、ムフの論考がシュミット論として的を射ているかとか、彼女の解釈は妥当かといった事実確認的な側面ではなく、その行為遂行的な側面が問われる。リベラリズム批判などに窺うことができるように、ムフのシュミット評価には現代リベラリズム批判も色濃く含まれているから、そのことはなおさらである。むろん最大の論点は、シュミット評価を通じて彼女が目指したもの、「敵対的なもの」から「争闘的なもの」への転換は説得的に展開されたかに向けられることは言うまでもない。

註１）シーダ・スコッチポルは 1960 年代以降、「古きアメリカ市民社会は…プロの支配するアドヴォカシー・グループや非営利組織の騒がしい群れによって迂回され、また脇に追いやられている。共有された市民性という理想や、民主的な梃子力といった可能性は、その過程で危うくなっていった」と言う。最近のアドヴォカシーの爆発は、「民衆のための、あるいは草の根の基盤」を欠く（190 頁）。そのために「ともにする」ことに代わって「ためにする」ことになってしまった（193 頁）。彼女は、アメリカの結社が非政治的に捉えられることを批判し、民主主義再生のためには全国的連帯の必要や「ナショナルな政治の改革」の必要を提起する。彼女の結論は、「市民社会の最良の部分を再創造する方法を探す」ということである。「民主的ガバナンスと多数の市民の関与を可能にする代議制システムを通じて自己統治する草の根結社の間のつながりを強化する方法を見出さなければならない」（250 頁）というのが彼女の結論である。（シーダ・スコッチポル『失われた民主主義』2007 年、慶應義塾大学出版会）。スコッチポルはつとにアメリカの市民社会が政治との連関のもとに歩んできたことを指摘している。例えば、Skocpol and Fiorina, eds. スコッチポルの諸論考参照。

註２）ネオリベラリズムについては、例えば David Harvey, *A Brief History of Neoliberalism*, 2005, Oxford. 参照。彼は、マルクスが原始的蓄積と呼んだ過程が現在進行しているという点から、グローバリゼーションとネオリベラリズムを捉える。

註３）ジュディス・バトラーは『生のあやうさ』（本橋訳）2007 年、以文社）で次のように「政治の空間」としての条件を指摘している。「このような私の自己形成条件を政治の空間で、…理解し確証していくことはいかにして可能となるだろうか？もし私が自律を求めて闘っているとするなら、私は何か他の者のためにも闘うことが必要なのではないだろうか。共同体のなかで密接に存在する私、他者によって刻印された私、他者を侵害してもいる私、それでいながら自分でコントロールもできず、予測もできない形で他者と関与せざるをえない私の捉え方のためにも闘うということが」。「私たちにとって自律を求めて多くのやり方で闘うことが

どうして可能か。そして同時に、定義上お互いに依存し合い、身体的に互いを傷つけあう可能性のある存在によって占められた世界に生きることによって、身に負わされた要求をも考慮することがどうしたら可能だろうか？こうした条件を別個にもっているということにおいてのみ、私たちが互いに似ているような共同体、すなわち差異なしに想定することができないような条件を皆が共有しているような共同体、これこそが共同体を想像するもうひとつの方法ではないだろうか？」。「共同体を構想することは、関係性をたんに私たちを形成してきた歴史的事実を描写するものとして捉えるだけでなく、それこそが私たちの社会的・政治的な生を規定しつづけているものとしての関係性を肯定することにつながるし、そうすると私たちは自分たちの相互依存を踏まえなくてはならなくなる」(60－61)。

また彼女はグアンタナモの無期限拘留の政治的意味について考察して、「イスラーム過激派」を「テロリスト」と言うとき「人間」という語が限定されて使われているとして、こう言う。「人間」という用語を捨ててしまうのではなく、それが「どう機能し、何をあらかじめ封殺し、何をときに開くのか」を検討する必要を指摘し、その意味合いのひとつは、「私たちが価値ある衝突が起こる世界に暮らさなければならない存在であり、こうした衝突が人間の共同体の何たるかを示す証なのだ。そういった闘争にどう私たちが対処するかが私たちの人間らしさのしるしでもあり、大事なことはそれが人間らしさを作っていくということである」(150)。

註4）ハンナ・アーレントは「暴力について」で、暴力を、一人でも行使できる道具であり、道具であるがゆえに正当化を必要とするものとし、権力は人々が集まって一致した行動をとるときはじめて生まれ、暴力とちがって正当化を必要としないものと、二つを対立するものと捉えたことは周知のことである。(高野訳)『暴力について』1973年　みすず書房。

註5）ジュディス・バトラーはハンナ・アーレントを批判してこう言う。すなわちグアンタナモでは、一方では、司法的に所属から切断されながら、他方、「内部化された外部としてのポリスの内に封じ込められる」存在を考察しないという意味で、ハンナ・アーレントの政治論は「政治的なものが本質的に…非－政治的なもの、あるいは、あからさまに政治的であることを奪われたもの（depoliticised）に頼っている」ことを無視した(Buttler and　Spivak 2007, 16)。

## 二

シャンタル・ムフは、『政治的なるものの再興』では主にジョン・ロールズら自由主義者（やマイケル・サンデルら共同体論者）を批判し、『政治的なるものについて』ではアンソニー・ギデンズやウルリッヒ・ベックという「ポスト政治論」者を批判する。彼女がポレミークの対象とするのはいずれも、「政治的なるもの」(the political) を見失ったとされる論者であるが、そのキー・タームたる「政治的なるもの」はタイトルにも用いられ、彼女の関心の所在を現している。彼女は「政治的なるもの」を「政治」と区別して、次のように定義する。「「政治的なるもの」ということで、人間社会の構成要素と考える敵対の次元のことを意味し、「政治」ということで、秩序をつくり、政治的なるものによって与えられる対立性のコンテキストでの人間の共存を組織する際の一連の慣行や制度のことを意味する」。「政治的なるもの」の定義では、敵対性が中心になっているが、これはもちろんシュミットの定義を念頭に置いている。そしてもう一つ重要なのは、「「政治的なるもの」の性格についての論議」が「民主主義の未来そのもの」にかかわっている」という点である（Mouffe 2005, 9）。

別の著作でも、「政治的なるもの」とは「人間関係の固有の敵対性の次元、いろいろな形をとり、社会関係の種々のタイプに出現する敵対性の次元」であると述べ、「政治」とは、「「政治的なるもの」の次元に影響されるがゆえに、つねに潜在的に紛争的な条件のもとで、ある秩序を樹立し人間の共存を組織化しようとする、実践、言説、制度のアンサンブルを指す」と言う（Mouffe 2000, 101)。そしてこの場合も「政治的なるもの」は民主主義と結びつけられる。

ムフは、「「政治的なるもの」の次元を承認し、「政治」が対抗性（hostility）を飼い慣らし、…潜在的な敵対性を分散することにあると認めてはじめて、民主政治の中心的問題と捉えるものを提起できる」と言う。政治空間のこのような裂け目を捉える視点は、ホーニッグの言う *virtù* 的立場を含意すると言ってよい。このような把握からす

ると、ロールズのような自由主義者が集合的アイデンティティの形成を理解できないのは、「政治的なるものの中心主題は紛争と敵対関係」であること、また決断の領域であって、理性的な合意の限界外であることを理解できないからである。

では、ホーニッグがアーレントに見た「家」と比喩的に表現される、政治から庇護された領域は、「政治的なるもの」の概念の中ではどのように扱われるのか。この問いに答えるためにも、ムフが依拠するカール・シュミットの「政治的なるもの」の概念に遡っておこう。

周知のようにシュミットは『政治的なものの概念』において、「とくに政治的な諸範疇として」、あるいは「特有の標識…とくに道徳的、美的、経済的なものに対して独自の仕方で作用する」標識として、友・敵という区別を措定した（シュミット 1971、14－15）。彼にとって、「友・敵概念は、隠喩や象徴としてではなく、具体的・存在論的な意味において解釈すべきである」（シュミット 1971、17）。この場合、一方では、「敵とは、競争相手とか相手一般ではない。また反感を抱き、にくんでいる私的な相手でもない。敵とはただ少なくとも、ときとして、すなわち現実的可能性として、抗争している人間の総体…なのである」。敵には、闘争する可能性のある、「公的な敵しかいない」（シュミット 1971、18－19）。「敵という概念には、闘争が現実に偶発する可能性が含まれている」（シュミット 1971、25）。他方、「闘争とは、競争ではなく、「純精神的な」論議の戦いではなく、さらには、そもそも人生全体が「戦い」」とか、「象徴的な「格闘」」という意味での闘争でもない。敵対関係とは、「抗争的な意味を持つ」のである（シュミット 1971、22）。「友・敵・闘争という諸概念が現実的な意味をもつのは、それらがとくに、物理的殺りくの現実可能性とかかわり、そのかかわりをもち続けることによってである。戦争は敵対より生じる。敵対とは、他者そのものの否定だからである」（シュミット 1971、25－26）。

敵のこの考えが「国家の内部での敵」に適用されると、一方で「過酷な、あるいは穏びんな、直接適応され、あるいは特別法に基づいて法律の形で効力を発する、むきだしの、あるいは一般的表現のかげに隠された」形で遂行される「人権の剥奪とか法的保護の停止」がなされる「国内的対敵宣言」がなされ、他方その帰趨は、「国家の敵と宣言された相手の出方次第で、内乱のきざし…となる」（シュミット 1971、49）。

もちろん、政治的なるものは、戦争そのものを目的として概念構成されているわけではない。シュミットも言う、政治的なるものは、「闘争それ自体にあるのではなく、…この現実的可能性によって規定された行動に、またそれに規定された自己の状況の明瞭な認識に、さらには、友・敵を正しく区別するという課題にある」（シュミット 1971、34）と。古賀啓太が指摘するように、シュミットの「政治的なもの」の概念は、「限界状況と関連して定義される」からである。彼によると、「シュミットの政治概念が現実の分析概念でもなく、はたまた規範的概念でもなく、「限界概念」であるということ」、「つまり人間の思考や行動が内戦という極限状況や《例外状況》に関連して規定されている」。なぜなら《例外状況》においてこそ事物の本質が現われ、《例外》こそが《常態》を支えると彼は認識したからである。《常態》は《例外状況》と関連づけられることにより、緊張感を獲得し、不断に戦争や内戦の勃発に備える思想や行動様式が生まれる（古賀 2007、13－14）。

政治的なるものをこのように規定する、この著は現代の政治を考える際のみならず、現代を読む際にも、いくつかの点で示唆的である。彼が行うリベラリズムの個人主義批判は、現代リベラリズム評価にも応用できる。彼は言う、「いかなる一貫した個人主義にも、政治的なものの否定〔という要素〕が含まれており」、そのため、「自由主義的思考は、きわめて体系的なしかたで、国家および政治を回避ないし無視する」と（シュミット 1971、88－89）。リベラリズムが政治を回避するのは、彼らが「倫理と経済、精神と商売、教養と財産という典型的な、そしてつねにくり返し現われる両極のあいだを動揺する」（シュミット 1971、90）からである。リベラリズムは、政治の特有性を両極への「侵略的暴力」として、否定/消去しよう

とするのである（シュミット 1971、91)。シュミットの「政治的なものの概念」規定はリベラリズム批判を動機にしたとさえ見てもよい。もちろんムフのリベラリズム評価でもシュミットの批判が援用されている。

シュミットは「サンジカリスト」と「多元的国家論」に言及し、それらが、国家の過大評価を批判した点を取り上げ、特に後者に関しては「政治的なものの明確な定義は見出せない」と批判する。それは「政治単位とはどのようなものであるべきかについては不分明のままである」（シュミット 1971、45）からだ。彼は友・敵結束という点から、この政治単位を国家と考え、したがって国家内部での多元論は理論的には認められない。

彼は「諸国家の多元論」註1）という意味では多元論を肯定する。ここでは、彼の国際秩序観の検討はしないが、「政治単位は敵の現実的可能性を前提とし、と同時に、共存する他の政治的単位を前提とする」、「およそ国家が存在する限りは、つねに、複数の諸国家がこの地上に存在するのであって、全地球・全人類を抱合する世界「国家」などはありえない」と述べるが、この意味で彼は伝統的なウェストファリア体制論者である。彼の「交戦権」の指摘もここから理解できる。交戦権とは「現実の事態のなかで、自らの決定において敵を定め、それと戦う現実的可能性である」（シュミット 1971、47)。そこでこう言う、「決定的な政治的単位としての国家は、途方もない権限を一手に集中している。すなわち、戦争を遂行し、かつそれによって公然と人間の生命を意のままにする可能性である」（シュミット 1971、48)。

このようなシュミットの「政治的なものの概念」をシャンタル・ムフはどのように読むか。彼女によれば、シュミットの「政治の友－敵理論」は、「リベラリズム批判」や「主権理論」と並んで、今日なお学ぶべきものがある。彼の洞察は「近代の政治的条件についてのわれわれの理解」に貢献しているからである、と彼女は言う。敵対関係（antagonism）としての「政治的なるもの」の概念は、例えば「さまざまな差異が抑圧の関係として構築され、それゆえラディカルな民主主義によって挑戦されるべき」もの、あるいは「存在するが存在すべきではない差異、存在しないが存在すべき差異」を区別するために重要である（Mouffe 1996(a), 247)。

リベラリズムには次のように批判する。「勝利を収めたリベラリズム」は、「人道主義的なレトリックが今日、政治的利害関係（stakes）を取り除き、西洋のリベラルは、共産主義の崩壊に伴なって敵対関係が根絶されたと想像して、「自己満足の危険」を抱えている。それは「「反省的近代」の段階に達して、倫理が政治にとって代わった」（Mouffe 1999, 2）との把握にも現れている。しかし、それこそはリベラリズムの「盲点（the blind spot)」であって、リベラリズムは、「ポスト慣習的アイデンティティ」の発達に伴なって、「友－敵政治の古代的形態は衰退しつつあり、国際的に遂行されるべき「審議的」ないし「対話的」デモクラシー形態の条件が熟したと主張」する。それはリベラル・デモクラシーのモデルとして「審議的デモクラシー」を提唱する。リベラリズムは、「大衆デモクラシーの発展とともに、標準的コンセンサスとなってきた、利害の交渉としてのデモクラシーの「攻撃的」モデルを拒否し、リベラルな民主主義の性格について別の見解を推奨する」（Mouffe 1999, 3)。それは「政治の終焉」や「左派と右派を超える「第三の道」」だけが唯一の道であると説く。そういうモデルでは、シュミット的な友－敵関係としての「政治的なるもの」を根絶し、「人民」のあいだでの包摂的コンセンサスが可能だとされる。シュミットは、「政治的なるもの」に固有の紛争性（conflictuality）の次元の根絶不可能性、法の政治的「外見」について述べたが、それは否定され、民主的政治には「中立化と脱政治化の過程が進行している」（Mouffe 1999, 2)。

こういうリベラリズムを拒否するムフは、シュミットの中心的な言明が「敵対を政治の決定的カテゴリーと見る必要性」であるとするなら、われわれに必要なのは、「紛争/敵対関係の次元での「政治的なるもの」と折り合い、社会的なものはつねに、ヘゲモニー的形象（configurations）を

通じて政治的に形成されると認識すべき政治的リベラリズムであると言う。権力関係の構成的役割を認めることは、「和解的民主主義社会についての誤解された観念を捨てることである。民主的コンセンサスとは紛争を含んだ（*conflictual*）コンセンサスである。民主的討論はすべての者によって受け入れられる唯一（the one）の合理的解決に達することを目標とするのではなく、敵対者の間での対立とみなされるべきだ」（Mouffe 1999, 4．傍点－原文イタリック）。

彼女はさらに続けて言う。「対抗者（adversary）のカテゴリーが、敵対的次元で、政治的なるものを否定しないようにリベラル・デモクラシーを再定義するのに決定的である。敵対者とは、ある意味で敵であるが、その者との間には共通の地盤がある正統な敵である。対抗者は相互に争うが、それぞれの立場の正統性を疑問視しない。彼らは、リベラル・デモクラシーの倫理－政治的原理への共通の忠誠心を共有する」。倫理－政治的原理の意味や履行については意見を異にするが、そのような不一致は「合理的な議論を通じて解決できるようなものではない」（ibid）。

リベラリズムは、排除があるということを矮小化し、またみずからの理論の排除性を否定するが、実はリベラリズムは敵対者の位置を別の方法で排除している。なぜなら、敵対性は利害の対立とされるか、「合理的な討議を通じて解決される」とみなされるからである。敵対者は「競争者か論争相手か」である。「リベラリズムは、倫理と経済の間で動揺し、必ず政治的なるものの特有性を捉え損なう」。これは先に述べたように、シュミットのリベラリズム批判をそのまま用いたものである（Mouffe 1999, 5）。

しかし、ことはリベラリズム批判だけで終わらない。確かにリベラル・デモクラシーの再定義のためには敵対性のカテゴリーを手離さないことが必要である。しかしリベラリズムが敵対性を否定することで排除を間接的に行ったとすると、シュミットは別の形での政治的なるものの否定にいたるからである。つまりシュミットの場合は「政治的なるものを民主的結社の外側に限定することによって」である（ibid）。これがムフのシュミット評の一端である。次章ではこの点をさらに確かめよう。

註1）彼が「諸国家の多元論」を述べたくだりの末尾で、「この地球ぐるみの経済的技術的集中と結びつく恐ろしい権力が、いかなる人びとの手に属するであろうか」と問い、その世界では「万事がまさに「おのずとはこび」、物事は「おのずと管理されるであろう」、またその際人びとは、絶対に「自由」なのだから、人間の人間に対する支配など不必要になっているであろう、などと期待することによっては、この問題は、決して片付け去るわけにいかない」（69頁）と述べたのは、まさに現在の課題を適切に指摘している。また、シュミットが同書末尾で描いている、「平和主義的用語が作りだされる」時代に用いられる言説は、現代の状況を見事に言い当てている。彼によれば、「そこにはもはや戦争という語はなく、ただ執行・批准・処罰・平和化・契約の保護・国際警察・平和の確保の措置だけとなる。対抗者はもはや敵とは呼ばれず、その代わりに、平和破壊者・平和撹乱者として、法外放置され、非人間視される」（102）。彼の記述は現代の正戦論に関して応用できるだろう。

シュミットが言う「世界「国家」」は、例えばネグリとハートが〈帝国〉で取り上げた問題と関連するし、グローバリゼーションのなかで、非領土的な民主主義が直面している問題とも関連する。その点で、シュミットの指摘は逆にわれわれに、現代の二重の課題を指し示している。つまり、シュミットは「世界「国家」」に伝統的な国家を対置するが、われわれに求められているのは、その二つとも乗り越える道を示すことではないか。

## 三

ムフにとってシュミットの意義は敵対関係としての「政治的なるもの」の概念にあったが、彼女自身は政治における敵対的なるものをどのように捉えるのか。そしてそれはなぜなのか。彼女は言う、シュミットのいう「政治的なるもの」は友－敵関係であり、それは、「「彼ら」との対立関係にたった「われわれ」の創設をともない、本来的に集合的帰属意識の領域に属する」と。「われわれ」と「彼ら」の構成は、「自由な討議に基づく合理的合意の限界を示唆し」、さらに究極的には合意が排除に基づくものであることを暴露する(Mouffe 1993, 123)。それゆえ、シュミットとの対決は、リベラル・デモクラシーのパラドックスを認識させてくれることにもなる。すなわち、社会的敵対性は、社会関係のなかに消し去ることのできない否定性を持ちこみ、「社会的意味が争われ、けっして安定化されない社会のなかでの限界点を現す。敵対性は社会的形成の境界線の証拠である」からである。したがって「アイデンティティはもはや差異的なシステムのなかで固定されず、秩序の外側にある…力によって異議申し立てが行われる点を示す」(Howarth and et al 2000, 9)からである。そこに、ヘゲモニー的プロジェクトの条件として敵対性と政治的境界が開かれる(Howarth and et al 2000, 15)。彼女の考えによると、敵対関係はつねに存在し、それは「取り除かれる(eliminate)のではなく、止揚される(sublime)」のである(Mouffe 2005, 20)。

ムフはシュミットの「政治的なるもの」の概念をこのように取り入れて、『カール・シュミットの挑戦』では、シュミット論の中心として、シティズンシップの境界とリベラル・デモクラシーのコンセンサスの性格の二つに、焦点を当てる(Mouffe 1999, 38－39)。

まず、シティズンシップ論を取り上げよう。そのときも、前述の問い、すなわち、政治から庇護された領域は、「政治的なるもの」の概念によってどのように扱われるのかという問いを手放さないようにしよう。

彼女はシティズンシップに関して現在、二つの立場が対立していることから説きおこす。すなわち、デーヴィッド・ヘルドに見られるように、グローバリゼーションの時代にはシティズンシップの従来の境界を超えるべきだとの主張がある。これに対して、市民的共和主義的(civic republican)シティズンシップ概念から、「国民－国家がシティズンシップに必要な場であり、コスモポリタンなシティズンシップという観念そのものには本質的に矛盾するものがある」と批判的に主張される。彼女の見るところ、この論争は「民主的な要請とリベラルな要請の対立」から、あるいは「デモクラシーとリベラリズムの緊張」から生じている(Mouffe 1999, 39)。

このような相反する主張に対し、彼女は、シュミットの「同質性 homogeneity」というデモクラシーの可能性の条件を検討することで解決を見出そうとする。シュミットは、「すべての現実的デモクラシーは、平等なものは平等であるだけはなく、不平等なものは平等に扱ってはならないという原則に基づく。それゆえ、デモクラシーは、第一に同質性を、第二に異質性の排除ないし除去を要請する」と言う。この挑発的な発言は、「リベラリズムが取り除こうとする民主的政治のある側面を甘受するようにわれわれに強いる」ことになる(Mouffe 1999, 39)。ところで、シュミットが言う「同質性」とは何か。それはまず、「市民は、平等に扱われるために、共通の実質(財産)に与らなくてはならない」(Mouffe 1999, 40)ということを意味する。「民主主義は、実質としての平等概念を求め、リベラルのような抽象的概念で満足できない」(Mouffe 1999, 39)。なぜなら「実質である限りで、平等は、政治的に興味あり、計り知れない価値を持つ」からだ。「同質性は、実質的な平等である限り、民主的な平等概念の核心そのものに書き込まれている」のである。

したがってシュミットは、「人類の全般的平等が国家や政府形態にとっての基礎として役立つという観念を拒否する。そのような人間の平等という観念は…平等の非政治的な形態である。なぜならそれは、あらゆる平等性が意味を受けとる可能的な不平等性との相関関係を欠いているからであ

る。…人間としてのすべての人間の平等性は、デモクラシーではなく、ある種のリベラリズム…個人主義的－人道主義的倫理…である」(ibid)。

シュミットには、「リベラルな個人主義と…本質的に政治的な民主主義的観念との間には…対抗があり、同質性に基づくアイデンティティを創る」という観念があった。シュミットによれば、リベラルな平等は、「すべての人間は人間として、他のすべての人間に自動的に等しいことを仮定する」。これに対して、民主主義的平等とは、「誰がデモスに属するか、誰がその外側にいるかを区別する可能性を要求する」。その意味で平等は不平等と相関する。その意味でまた「人類のデモクラシー」は純粋の抽象にすぎない。シュミットは、「平等の民主的な概念が、区別（distinction）の可能性を伴なう政治的（political）なものである」ことを強調する（ibid)。しかもこの文脈では（註1)、「人民への所属が人種的観点でのみ見られるということを彼は決して前提にしなかった」とも指摘している。「平等の実質は、たとえば市民的徳（virtue)、アレーテにおける肉体的・道徳的平等、ヴェルタス（vertus)、古典的デモクラシーの中に見られる」(Mouffe 1999, 40－41）と言う。

シュミットにとって重要なのは、「デモスに属する者と、政治的領域では同じ権力のもつことができない者の間には一線（a line of demarcation)」を引くことであった。つまり平等は不平等を伴う。「今日シティズンシップを通して現れている、民主的平等は、…彼にとって、他の形態の平等の土台であった」。「人類という抽象的観念への参加のゆえにではなく、デモスに属するということを通じて、民主的市民は、平等な権利を与えられる」。このことのゆえに、「デモクラシーの中心的概念は、「人類（humanity)」ではなく、「人民（people)」という観念であり、人類（mankind）のデモクラシーは決してありえない」と宣言する（Mouffe 1999, 41)。

「政治的なるものの領域では、人民は互いに抽象的な者ではなく、政治的に利害関係ある者・政治的に決定された者として、市民として、支配者あるいは被支配者として、政治的味方あるいは敵として――それゆえに、いずれにせよ政治的カテゴリーで出会う」と彼女は言う。したがって、「近代の民主的国家においてさえ、外国人あるいは他国者として排除される人々のカテゴリーがあり、人間の絶対的平等はありえない」のである。「国家の中で見出せる市民の間の平等の相関は、国民的同質性の強度な強調であり、国家に属する者と外部にとどまる者の間の一線」である（ibid)。

ところが実質的不平等は、領域の転換すなわち「政治的なるもの」から「経済的なもの」へ転換されることによって、シュミットの指摘通り不可視になっている。しかも「上層の政治的な平等性の下で、実質的な不平等が優勢であるもうひとつの領域が政治を支配する」。ここからムフは、シュミットの指摘は「政治にたいする経済の支配の洞察」であり、また彼の指摘はグローバリゼーションが世界的な民主化の基礎になるとか、「コスモポリタンなシティズンシップ」の樹立につながるとかという見方への警告となると捉える（Mouffe 1999, 42)。

ここに彼女は平等が政治的であり、かつ「われわれ」と「彼ら」の区別が不可欠であるであると見る。つまり一方で、デモスがいなければ、コスモポリタンな市民はさまようだけだからであり、他方、さらに悪いことには、「あらゆる可能性で、そのようなコスモポリタンなデモクラシーは現実には消えゆく民主的政府形態を偽装し、フーコーが「統治性」と呼んだ政府合理性のリベラルな形態を示す空っぽな名前に他ならないだろう」と。

むろん、シュミットの主要な関心は、民主的な参加にあったのではなく、「政治的統一」にあったので、その点では彼女の企ては、シュミットの「政治的な概念」への「暴力」的な読みである。しかし、そのことを考慮しながらも、「この統一への参加を通じてこそ、市民は平等として扱われ、民主的な権利を行使できる」という点で、シュミットの意図とかけ離れているわけではない。「人民が支配するとするなら、誰が人民に属するか決定することが必要である。民主的権利の担い手が誰であるかを決定する基準がなければ、人民の意思は現れない」（ibid）からである。シュミットは「リベラ

ルな諸制度による人民の民主的意思に対して課される制約を軽蔑する」(Mouffe 1999, 43)。

さらに彼女はこう付け加える。「デモクラシーの論理は、「人民」を構成する過程そのものによって要請される閉鎖の契機 (a moment of closure) を意味する。これは避けえない。…ただ別様に交渉されうるのみである。しかし次には、この閉鎖、そしてそれが意味するパラドックスが承認された場合にのみ、このことはなされうる」と (ibid)。「民主的な政治的共同体の同一性が「われわれ」と「彼ら」の境界 (frontier) を引くことの可能性を決定する」とシュミットが指摘することで、彼は「民主主義は常に包摂－排除の関係を伴なっている」ことを明らかにした (Mouffe 1999, 43)。「デモクラシーの主要な概念は「デモス」と「人民」であることを強調することである」(ibid)。これに対して、リベラリズムはそのような境界を概念化できず、人民の構成と適切に取り組めない。

この点からすれば、リベラリズムとデモクラシーには調和的関係ではなく、緊張を取り上げるべきなのだ。それは「リベラルの平等概念と民主的な平等概念の決定的な相違」を承認することでもある。そのような緊張の場を明確にすることが重要である。このことは、「人民を構成し、権利と平等を実際に書き込む民主的論理が、リベラルな言説に固有な抽象的普遍主義へ向けた傾向を転換するのに必要である」(ibid)。

ムフによると、シュミットは、「政治的アイデンティティの関係的性格を前面に出すことによって」ポスト構造主義のような、現在の思想を先取りした (Mouffe 2005, 14)。その点で、カール・シュミットの著作は民主主義体制の性質と可能性の研究にとって「パラメーターの役割」を果たす。もちろんシュミットは、「同質的なデモスの存在」を要請し、多元主義 (註２) を認めない (Mouffe 1993, 118)。彼にとっては、国家の多元主義だけが正統であった (Mouffe 1993, 14) からである。しかしシュミットはけっしてポスト構造主義的ではなく、詳細に見ると、ムフの敵対的なものの評価はシュミットのそれと微妙にずれてくるのではないか。シュミットは『政治的なものの概念』で、敵を物理的に抹殺すべき相手と定義している。しかも「内敵宣言」などは当時の状況を考えると非常に生々しい。これに対しムフは、敵を対抗者と定義し直し、まさにポスト構造主義の考えを用いて、「構成的外部」や象徴的対抗者を持ち出す。デリダの「構成的外部」の概念の重要性を述べて彼女はこう言う。少し長いが彼女を引用しておこう。

「構成的外部の概念こそ、集合的な政治的アイデンティティの構成におけるわれわれ/彼らの客観性と中心性のすべてに内在的な、敵対性を把握する際の脱構築的アプローチの有益性を強調するのに役立つ。…構成的外部とは弁証法的な否定ではない。真の外部であるためには、外部は内部と共約不可能でなければならない、しかし同時に、後者の出現の条件である。これが可能なのは、外部であるものが単に具体的な内容において外部であるだけでなく、その具体性そのものを疑問に付す何かでなければならない。…構成的外部とは、別の内容によって肯定/否定されるひとつの内容ではなく、その構成の緊張のラディカルな決定不能性を示すことによって、その肯定性そのものを、それを越える何かのシンボルの機能とする内容である。それは、肯定性そのものの可能性/不可能性である。この観点からすると、…彼らとは、具体的なわれわれの構成的な対抗者ではなく、いかなるわれわれをも不可能にするもののシンボルなのである」(Mouffe 2000, 12－13)。

「構成的外部」については、その痕跡を探すというデリダを引きつつ、次のようにも述べている。

「すべての対象はそれ自身以外の何かに書き込まれ、その結果として、すべてのものが差異として構成されるがゆえに、その存在は純粋の「現前」あるいは「客観性」とは考えられない。構成的外部は、そのつねに現実的可能性として、内部に存在するので、すべてのアイデンティティは純粋に偶然的である。このことが意味するのは、われわれは権力を外的なもの、すなわち、ふたつの既に－構成されたアイデンティティのあいだで起こる関係としてではなく、むしろ、アイデンティティそのものを構成するものとして概念化すべきである。

客観的なものと権力の合流点が、「ヘゲモニー」と呼ぶものだ」（傍点－原文イタリック）（Mouffe 2000, 21）。

それは確かに、政治的境界についてのシュミットの理解とは別様のものを提起している。ポスト構造主義からすれば、差異は除去できず、多元主義の認識をもたらすという点で、シュミットとのずれは明確だ。そこで彼女は言う、「差異が、統一と全体性の構成の可能性の条件である、と同時にその本質的限界をもたらす、と認識させてくれる。そのような見解では多元主義は除去できない。それは還元不可能である。われわれは、ひとつのもの（oneness）や調和に他者性を完全に再吸収するという観念を放棄しなければならない」（Mouffe 2000, 33）。

この認識は次のような立論に繋がる。すなわち、われわれ/彼らは、必ずしも友/敵関係を指すわけではない。したがって「民主的政治の課題は、われわれ/彼らを違ったふうに確立することによって、敵対性の出現が起こらないようにすることにある」（Mouffe 1993, 16）。アイデンティティは同一化の過程の結果であり、決して「完全に固定されない」。「「彼ら」が「われわれ」の可能性の条件、つまりその構成的外部」であるということは、「特定の「われわれ」の構成は、つねに、差異化された「彼ら」のタイプに依存しているということである」（Mouffe 2005, 18－19）。したがって「「彼ら」が構成されるやり方に応じて、われわれ/彼ら関係の異なったタイプの可能性」があるということである。「多元的デモクラシーと両立可能なわれわれ/彼らの対立の形態を利用できるよう、敵対関係は転換されうる」である（Mouffe 2005, 19）。われわれ/彼らの敵対関係をどのように緩和する（defuse）か。それが乗り超えられないのだとしたら、それを「手なずける」のは何か。またそれはどんな形をとるか（Mouffe 2005, 19）。

そこで試みられるのが、デモクラシーの課題を敵対性から争闘へ転換することである。それはこう考えることである。「敵対性（antagonism）が、共通の基盤を共有することのない敵同士の二者であるようなわれわれ/彼ら関係であるのに対し、争闘（agonism）は、競合し合う当事者が、その紛争には合理的解決はないと認めながらも、それにもかかわらず、その対決者（opponent）の正統性を認めるようなわれわれ/彼ら関係である」。相手は敵（enemy）ではなく、対抗者（adversary）である。このことによって、反体制派は暴力的な形態を取らない反対運動を続ける。このことは、自らが「同じ政治結社（the political association）に属し、共通の象徴空間を共有している」と見なすことである（Mouffe 2005, 20）。

彼女は次のように整理する。政治は合理性の限界を示し、合理性に還元することはできない。したがって、政治哲学の重要な役割は、「シティズンシップの特定の理解への帰属意識によって、統一性を政治的に創出すること」にある。その際、まず第一の課題は、正義・自由・平等についての異なった解釈の提示を許すような、政治的共同体は何かを明らかにすることである。われわれは「いかなる政治的共同体を構成したいのか」（Mouffe 1993, 115）。彼女によると、その「政治的共同体」とはギリシア的意味でのポリテイア（politeia）、つまり「「政治的な」社会形態、新たな政治体制」である（Mouffe 1993, 117）。

そこでは、万人の自由と平等という原理は、体制に特有な政治的共通善を構成する（Mouffe 1993, 114）。しかし、自由や平等の適応は競合的解釈に供され、共通善も実現されるのではなく、「仮想の領域（foyer virtual）」に留まる。近代とは、最終的固定化の言説の可能性が排除され、その代わりに「結節点」が、自由と平等の意味を一時的に固定させる試みとして創出される。自由民主主義は「われわれ」を創出する政治的共同体の構築を目指すが、「完全に包括的な政治的共同体は決して実現できない」。なぜなら「われわれ」の創出は「彼ら」との区別、境界線を引くこと、「敵」を定義すること、先に述べたように「構成的外部」、すなわち「共同体の存在を可能にするような外在者」の存在を意味するからである。実にシュミットも「アイデンティティの関係的な性格、アイデンティティ/差異という不可避な結合（couple）」

を見ていた（ibid）。したがってこの「政治体制」の概念は分離と闘争、友/敵関係の場所を含むのである、と。

註1）シュミットの人種概念については、大澤真幸『ナショナリズムの由来』（2007、講談社）、779頁以下参照。

註2）コノリーの多元主義とムフのそれを対照するというのは興味深いテーマである。というのは、コノリーが多元主義を賞揚する背後には、彼の信仰へのコミトットメントがある（この点はConnolly, *Why I am not a Secularist*, 1999, University of Minnesota Press.）のに対し、ムフは多元主義を近代における「確実性の喪失」という点で正当化するからである。ただそれと並んで、ふたりに共通点もあるからでもある。例えばコノリーはテロリズムとの戦いが提唱される時代に、多元主義の根拠について次のように述べる。かつてレオ・ストラウスが述べたように、論争は「信仰と不信のあいだ」にあるのではなく、「世界からの超越に肯定的な信念を抱くことと、世界の内在性へ肯定的な信念を抱くことの差異」にある。そして、彼もムフと同じように「文化敵対性 antagonism」論争を、「当事者間の、争闘的な agonistic 敬意によって特徴づけられる論争にかえる」ことが高貴な対応であると述べる。彼の主張では、そのような論争が拒まれるかもしれないが、国家内での、そして国家間での暴力がこのような違いの頑固さにあり、また「後期近代は、大部分の領土的体制では、異なった信仰、信条、哲学の当事者が住まう時代であるなら、公的な知識人は（…）この検証 examine の設定をリードすべきである」（Connolly 2005, 46）。

## 四

友/敵関係を基調として政治概念を構成することは、当然のことながらコンセンサス論に関わる。言い換えれば、民主的論理に伴なう「閉鎖の契機」はリベラルな民主主義社会でのコンセンサスとは何かという論点を提起することになる（Mouffe 1999, 44）。確かにリベラルな論理は「人権」によって「排除の形態」に挑戦させる（Mouffe 1999, 43－44）が、ムフにとって重要なのは、節合（articulation）とういう観点であり、さらに節合によって生まれるのは最終的解決ではなく、「一時的で、プラグマティックで、不安定で不安な交渉」であるという観点である。「リベラルな民主主義政治は常に、この構成的パラドックスの ── 別のヘゲモニー的節合を通じて ── 交渉と再交渉の過程にある」（Mouffe 1999, 44）。

これに対し、例えばセイラ・ベンハビブは合理的・公正な合意を求める。彼女は「合理性と正統性の調停」、言い換えれば「共通善の表現は人民の主権といかに両立できるか」という民主主義の決定的問題に関心を向ける（Mouffe 1999, 44－45）。そして、集合的決定作成過程に関する「正統性と合理性」の達成は、「政治体制の諸制度との相互にからみ合う関係が、すべての者の共通の利益とみなされるものが自由で平等な者の間で合理的・公正に行なわれた集合的討議の過程から生れるように編成される場合、その場合にのみ」可能であると言う（Mouffe 1999, 45）。つまり、「決定は、すべての者の利益において平等である公平無私な立脚点（*standpoint*）を代表するという前提に基づいて」のみ（傍点－原文イタリック）拘束的権力を行使できるというのである。

ムフによると、このモデルの背後には次のような観念がある。つまり「結果に影響を受けるすべての者によって受け入れられた」ときのみ、規範は妥当である。そしてその論理を以下のような特徴を持つものとして示す。

(a) 討議への参加者は、言語行為、質問、問い質し、討論において同じチャンスをもつという点で、「平等性と対称性の規範」に支配されている。

(b) すべての者が、会話に与えられたトピックを

「疑問視する権利」をもつ。
(c) すべての者が、言説過程のルールやその遂行について「反省的な議論」を始めることができる。アジェンダや会話を制限するものはなく、「参加者のアイデンティティ」を制限するものはなく、誰もが排除されない。ここでは「単なる合意と合理的コンセンサス」が区別されている。それを保証するのは、「公的討論の過程」が「理想的言説の条件」を実現するということである（Mouffe 1999, 45－46）。つまり、過程が結果を保証する。「過程の価値 ── 公平無私で平等であり、開放的で強制のなさ、全員一意」 ── が、…その結果が正統であること ── 参加者全員が合意できる一般化可能性 ── を保証するのである。そのため、ロールズは、立憲的デモクラシーの「暫定協定（modus vivendi）」モデルを不安定なものとして拒否した（Mouffe 2000, 48）。

古賀の言うように、この批判もシュミットを援用していると言ってよい。シュミットにとって、《討論》とは商議・交渉・妥協 ── 自分たちの利益をはかろうとして取引上の妥協に達する ── から区別され、《一般意志》── 単なる合意ではなく、参加者誰もが承認されうるような理性的合意 ── が形成されるものと理解した。この点はハーバーマスも同じであり、「理想的な発話状況は、実現可能性を前提としているものではなく、カントの《統制的理念》に似たものであり、そこに近づいていくべきものであった（古賀 2007, 39－41）。

ハーバーマスにとって、全員一致への障害は「経験的である」。つまり、われわれが自分の「特殊な利害を脇に置く」とは考えられないことから生まれる。このため「理想的な言語状況が統制的な観念である」理由となる（Mouffe 2000, 48）。しかし全員一致を阻むものを単に「経験的」とだけ捉えてよいのか。ムフが言うには、「「人民」の政治的構成に必然的に書き込まれた包摂－排除の関係」がデモクラシーを形成し、それが「理想的言語状況の理念の実現」を妨げる。それゆえ、「共通の関心事についての自由で強制のない公的な討論は、「われわれ」と「彼ら」の境界を引く民主的な要請に対抗する」のである。デリダ的表現を使えば、「デモクラシーの行使の可能性の条件そのものが、同時に、審議的デモクラシーによって描かれたものとしての民主的正統性の不可能性の条件を構成する」。認識すべきは、「リベラル民主主義的社会のコンセンサスは、ヘゲモニーの表現、権力関係の結晶化であり、常にそうであろう」ということである。正統なものとそうでないものの境界は、「争われうる（contestable）」。このことを否定するのは、「包摂－排除の特定の体制を通じた「人民」の偶然的で一時的なヘゲモニー的節合として認識されるべきものを自然化することになる」。その結果、人々のアイデンティティを、「多くの可能な形態の同一化のひとつに還元することによって」「物象化」する（Mouffe 1999, 46）。

そこで彼女は合理的コンセンサスを退け、節合という観点を強調する。節合概念が提起するのは、「排除なしでは合理的コンセンサスを樹立することは不可能」であるという点でもある。「審議的デモクラシーの名で最近多くの注目」を受けている民主主義モデルの論者たちは、「デモクラシーの利益に基づく概念に対抗して、…政治に道徳性や正義の問題を導入し、民主的シティズンシップを別の方法で描きたいと思っている」が、しかしシュミットが指摘したように、理性や合理性を提起することによって、「経済的モデルに代わって、政治的なるものの特有性を捉え損なっている道徳的モデルに替えるだけである」。彼らは、シュミットが警告したように「国家や政治を無視し、倫理と経済、知性と交易、教育と財産という…二つの異質な領域の両極性」へと動く。

ポスト政治論への同様な批判も確認しておこう。ムフによれば、ウルリッヒ・ベックやアンソニー・ギデンズに代表されるポスト政治論も敵対関係を明確にできないという点で、伝統的なリベラルの政治像にとどまる（Mouffe 2005, 52）。彼らは、階級というカテゴリーに基づく運動ではなく、新しい社会運動 ── ベックが「サブ－政治」と呼び、ギデンズが「生－政治争点」と呼ぶ ── を民主的闘いにおいて重視するが、「民主化のラディカル化は、現存権力構造の転換、新しいヘゲモニーの建設を必要とする。…新しいヘゲモニーの建設と

は、ラディカルな民主主義の力の「集合的意志」、「われわれ」を形成するために、新旧の多様な民主的闘争の間での「等価性の鎖（chain of equivalent）」を建設することである」。「われわれ」を建設することは、「「彼ら」、抗争相手の決定」を通じてである（Mouffe 2005, 53）。

最後に彼女の多元主義論を取り上げておこう。ムフによると、リベラリズムは一見多元主義を肯定するかのように見えながら、実は多元主義を否定する。なぜなら、ハーバーマスやロールズにとって「コンセンサスの創設の条件そのものが公的領域からの多元主義の除去であった」（Mouffe 2005, 46－47）からである。「リベラリズムは単に、社会のなかにすでに存在する多様な利益を公的領域へ移し替え、政治的契機をその政治的表現から独立した利益の間での交渉の過程に還元するだけである」。そのようなモデルには、「民主的市民の共通のアイデンティティにとっての場」はなく、「シティズンシップは法的な地位に還元され、人民の政治的構成の契機は前もって排除されている」（Mouffe 2005, 47）。

他方、シュミットは「われわれ」と「彼ら」の境界を引くべき必然性を強調した。もちろん、シュミットは政治的民主主義社会には多元主義を認めなかった。「デモクラシーは同質的デモスの存在が必要であり、これが多元主義の可能性を排除した」（Mouffe 2005, 48）からだ。彼にとっては「諸国家の多元主義」だけが正統な多元主義であって、国家は、教会や労働組合のような「単なる結社」ではない。もっともシュミットは、後には多元主義が「もっとも高度な工業社会に存在する経験的条件に対応する」事実から来ていると述べた。多元主義とは、国家は多様な社会集団に依存しているからである。彼は、経験的には「多元主義者は要点をついている」と見たのである（Mouffe 2005, 49）が、肯定的に捉えたわけではない。シュミットがそれを否定的に評価したのは、「国家は弱められている」からである（Mouffe 2005, 48）。

この多元主義評価がムフのシュミット評価の中心にある。彼女は次のように整理する。実はシュミットは偽りのディレンマ――「人民の統一、このためにはデモスから分割と敵対関係を除去する」か、「デモス内のある形態の分割は正統とみなされて、政治的統一と人民の存在そのものを否定するような多元主義」に至るか、というディレンマに陥った。言い換えれば、シュミットにとっては、「国家が、多元主義、競争、無秩序によって特徴づけられる市民社会に、その命令とその合理性を押しつけるか、それとも…社会的多元主義がその意味の政治的実態を空っぽにし、その他者、すなわち自然状態に逆戻りしてしまうか」であった（Mouffe 1999, 49－50）。この点は、近代性の評価に関わるが、『民主主義のパラドックス』で次のように述べている。近代のデモクラシーは「多元主義の受容」にある。なぜなら「多元主義とは、善き生の実質的観念の終焉、すなわちクロード・ラフォールが「確実性の印の消滅」と呼んだもの」であるからである（Mouffe 2000, 18）。

しかし多元主義の限界も見なければならない。すなわち、多元主義とは、「あらゆる差異の価値保持（valorization）」には限界を設けるべきではない、という「極端な多元主義」を意味しない。つまり重要なのは、「ある差異がどのように従属関係へと構成されるか、したがってラディカルな民主政治はいかにそれに挑戦すべきか」という問いである。「共通の基準（denominator）なしでは、多数のアイデンティティのみが存在し、存在するが存在すべきではない差異と存在しないが存在すべき差異を区別することが重要である」（Mouffe 2000, 20）。無制限の「多元主義が見落としているのは政治的次元である。権力の諸関係と敵対性が消去され、われわれには、敵対性抜きの多元主義の典型的なリベラルの幻想が残される」。

問題は、シュミットにとって国家の統一はあらかじめ与えられているということである。そのために、「「われわれ」と「彼ら」の間の区別は、政治的に創設されるのではない、それは単に、すでに存在する境界（borders）の承認にすぎない」（Mouffe 1999, 50）。「「われわれ」に焦点をあわせ、その構成要素を統一する絆の性格」を考えるとき、「「われわれ」の可能性の条件が「彼ら」の存在であるということ」は、主題の全部を尽くしていない。つまり「統一の別の形態が「われわ

れ」の構成要素のあいだで樹立されるかもしれない」（Mouffe 1999, 47）のである。

ここで彼女の論点はシティズンシップ論で指摘した点に戻ってくる。つまり一方で、もし国家の溶解が政治的に可能ならば、「そのような統一の存在が政治的に構築される必要のある偶然の事実である」ことになる。他方、統一は、統一の生産の政治的条件を無視する明らかさをもった事実（factum）として現れる（Mouffe 1999, 50）。必要な解決は、「同質性」ではなく、「共通性」の構築である。その共通性を、ある種の多元主義 ── 政党の多元主義だけでなく、宗教的、道徳的、文化的多元主義 ── と両立可能なかたちで、「デモス」として設立することである。

それが「民主的なシティズンシップの多元的見方の定式そのもの」である。「多元主義とリベラル・デモクラシーの両立性」について考えるためには、「「人民」をすでに与えられたものとする観念」を疑問に付すべきである（ibid）。「人民の統一は、政治的構築の結果であると認める」べきだ。それは「政治的節合」を通じて可能である。人民のアイデンティティは「ヘゲモニー的節合の政治的過程の結果」である。「そのようなアイデンティティは決して完全に構築されることはなく、同一化の多様で競合しあう形態を通じてのみ存在しうる」。それゆえ、「合理的」と称されるコンセンサスの樹立を通して、対抗の空間を埋めるのではなく、永遠に開放しておくことが重要である。「境界の決定、「彼ら」の定義なしには、ヘゲモニー的節合はない。しかし、リベラル・デモクラシーの政治の場合、この境界は内的であり、「彼ら」は永遠の外部者である」。「包摂－排除の二重の動きに対応してのみ…われわれは、今日グローバル化の過程に直面する際の…挑戦に対応することができる」（Mouffe 1999, 51－52）。ムフの考えでは、このような「反人種差別主義、反性差別主義、反資本主義のあいだの等価的節合は、それぞれの闘争の強化の条件であるかもしれないヘゲモニー的構築を要求する」のである（Smith 1998, 200）。

このとき、政治から庇護された「家」の領域も存在しないのは言うまでもない。

## 五

ムフはなぜシュミットの「政治的なるもの」を強調するのかという問いには、さしあたって、リベラリズムに顕著なように、近代性に「政治的なるもの」の消去を見たからだと答えることができる。しかし彼女のシュミット評価はもちろん思想史的関心に尽きるものではなく、民主主義論の構築にシュミットが重要であるということにある。すなわち、本稿でパフォーマティヴなシュミット読解と呼んだものによって彼女が行おうとしたのは、ラディカル・デモクラシー理論（註1）の構築のためであった。

そのラディカル・デモクラシーが未完であることは、アイデンティティ形成、節合、ヘゲモニーが偶然的であり、決して最終的なものとはなりえないとの主張から言って当然である。彼女自身がこう述べている、「民主主義とは、何か不確実な面をもつもの、生起しそうにないもの、けっして自明と受けとめてはならないものである。それは、つねに壊れやすい勝利なのであり、不断に深化され、擁護されていく必要がある」（Mouffe 1993, 6）と。またより明確に、「民主主義は、その実現の契機そのもののなかに、それ自身の崩壊の端緒をもつ。民主主義とは、完全には実現できないものである限りで、善きものとしてとどまる。そうした逆説的な種類の善として把握されるべきである。…そのような民主主義は、つねに「来るべき」民主主義である」（Mouffe 1993, 8）。

しかし、彼女の構想がシュミットの「政治的なるもの」の読みから引き出されるか。それには批判的な指摘がなされている。ムフは、繰り返せば、政治的なるものは、「決定不可能なもの」を決定することにあり、またアイデンティティを形成する場であるとする。そういう意味で敵対的な関係は消去できず、そのなかで「多元的民主主義の秩序が可能になる諸条件」をいかに創出すべきかを探らなければならないとした（Mouffe 1993, 152）。しかし、そもそもシュミットの「政治的なものの概念を自由民主主義の構成原理に組み入れること」は可能なのか、という問いはある。シュミットとムフのあいだのずれは既に見たが、古賀は、

「《敵》を《対抗者》に、《闘争》を《アゴーン》に変えることがシュミットの政治的なものの概念を正当に理解している」か（古賀 2007，43、註2）、また、「敵（enemy）」を「対抗者（adversary）」に転換し、排他的な「同質性（Homogenität）」を闘争的な多元主義を許容する「共通性（commonality）」に転換しようとするムフの試みは、シュミットから引き出せるのかと問う。

本稿は、ムフのシュミット解釈が正当であるかという問いを掲げていないが、この批判に関連して一つだけ指摘しておけば、ムフは antagonism がすべて agonism に転換されるとは考えていなかったのではないかということができる。というのは、彼女は、多様な形態をとる敵対関係に「多元主義的民主主義のシステム内部で政治的捌け口を提供するのが、好ましい」と考え、「敵対行為の契機を、その潜在力を拡散させるしかたで形成していく」と見なしたからである（Mouffe 2005，5）。彼女は、「われわれ/彼ら」の「差異の様式においてのみ考えられていた他者」が、「われわれのアイデンティティを否定する存在」、「われわれの存在それ自体を疑問視する存在」の関係としての「友/敵」関係に変質してしまうときに、「政治的な敵対関係の場」が形成されるとも述べている（Mouffe 1993，3）。また別の個所で、今行われている「闘争は、自由民主主義体制と他の代替的な政治体制のあいだの闘争ではなく、あくまで自由民主主義体制内部でのその優先順位をめぐる闘争」（Mouffe 1993，150）とも述べている。

シュミットにおいては「アゴーン」と「闘争」とは区別されていたという古賀の指摘も傾聴に値する。シュミットでは、「アゴーン」は「競争」や「討論」と同じように捉えられ、「闘争」は「特定の目的を念頭においている」。繰り返せば、「アゴーン」では「そこでの勝利が目的とされる」。「アゴーン」は「ルールに基づいて行われる」競技であり、「政治的統一を前提」とするが、「闘争」は「まさに生と死の実存的闘争である」、「政治的統一そのものを脅かす潜在的な内戦状態である」。「政治的なものは、闘争そのものを目的としているのではなく、秩序の形成を目的としている」。アゴーン的民主主義者には、「理性的合意形成には批判的」だが、「《人間の尊厳》や《敵への敬意》が前提とされている」。つまり「友・敵の実存的・物理的対立にエスカレートする危険は存在しない」。その意味で、「シュミットの《闘争》概念を《アゴーン》に変えようとする試みは、シュミットの概念を解体しようとする試みであり、《闘争》を《競争》や《討論》に変えようとする試みと同一線上にあるものであろう」と手厳しく批判する（古賀 2007，44－46）。

こうしてシュミットの「政治的なるもの」という「限界概念」は「硬直化し、ステレオタイプ化した思考を鍛え直す触媒になりうること」は事実であるが、「シュミットをカンフル剤として飲む」ならともかく、服用するにはよほどの注意が必要であると総括的な批判を下す（古賀 2007，47－48）。

ムフはこれにいかに応えるのか。彼女はシュミットの挑戦に応えることを「左派シュミット派」の問題提起ではないと述べているが、その政治的立場は「現代の西洋社会の言説領域は資本主義的、性差別的、人種差別的、外行人嫌いの力によって構成されている」述べていることからも分かる（Smith 1998，71）。この言説への反抗の可能性は社会的なものがけっして縫合されないことに見出される。すなわち「言説理論のなかには、否定性の契機、すなわち境界線構築と敵対性の展開を重んじる傾向がある」（Howarth and et al 2000，9）ということに見出される。しかし言説理論、すなわち「結節点と空虚なシニフィアンの概念化」（註3）だけでは、なお、部分的な固定化の出現と構成の疑問に答えきれず、「政治的な次元の優先性を主張」することが必要となる。このように言説理論と「政治的なるもの」の把握の結合が彼女の政治理論の特徴である。したがって彼女は「政治が可能になるのは、社会の構成的不可能性が空虚なシニフィアンの生産を通じてのみ自らを表す」（Howarth and et al 2000，9）ことを明らかにする。「境界線があるところにのみ政治があり、境界線が敵対的な「友/敵」関係の構築にあるとするなら、境界線形成の契機はアイデンティティの差異的な次元に対してはっきりと優先

される」（Howarth and et al 2000, 223）からである。繰り返せば、友/敵関係を政治に構成的なものと扱う「政治的なもの」の理解と、否定性の契機を含む言説理論を結合しよとする。付け加えればこの結合は、ヘゲモニー、等価性・差異性の原理を媒介にして行われる。

したがって、彼女の理論的問いは敵対性をいかに戦争や闘争ではない形で政治論に組み入れることができるかである。そこで「敵対関係が、争闘関係に転換できるような方法」を探る。先に指摘したように、彼女は敵対性の二つの形態を区別する。第一は敵対性そのもの、「共通の象徴的空間のない人間」の間で起こる敵対であり、もう一つは「アゴニズム」、「敵ではなく、「対抗者（adversary）」」、「友好的敵」、あるいは「共通の象徴的空間を共有してもいるがゆえに友でもあり、またこの象徴的空間を別様に組織化しようとするがゆえに敵でもある」と解することができる敵対性である。後者によって多元主義的デモクラシーが可能になる（Mouffe 2000, 13－14, 103）。

つまりムフはあらゆる敵対関係をアゴーン的関係に変えることが可能だとは考えていない。それは、次のような彼女の発言にも示唆されている。多元主義的民主主義を維持するために必要な「合意」は、「無知のヴェール」の下とか「中立的対話」からではなく、「民主主義の諸制度に対する忠誠心を涵養する」ことによって生まれる。それは、「民主主義の諸制度への帰属意識を、強力な形式で創出することによってのみ可能となる。こうした帰属意識の強化は、民主主義に適った諸種の「主体位置」を生み出すかたちの言説や実践や「言語ゲーム」を、可能な限り多くの社会的諸関係のなかで展開し増殖することによって図られる」（Mouffe 1993, 151）。

選択の過程でいくつかの選択肢は周辺化されるが、けっして消滅するのではなく、そのなかのあるものはふたたび活性化する。したがって、合意の存在は、ロールズの場合のように、「合理性と道徳性」に基礎づけられているとは考えない。さらに「リベラル・デモクラシーが、合理的な個人が、理想的な状態で選んだモデル」とは見なさない（Mouffe 1993, 121）。それは「暫定協定」に過ぎず、それに異を唱える人々は、「当該の自由主義的「暫定協定」の「内部には」彼らの要求が占める余地は明らかに存在しない」（Mouffe 1993, 152. なお「暫定協定」については、Mouffe ed. 1996 (c)も参照）。むしろ、合意とは「われわれが抱く自由民主主義の諸価値や正義の構想を異議あるものとして永久にみなす、そうした」「外部」の存在を前提にして初めて成り立つ。

しかし繰り返し指摘したように、彼女は多元主義の限界をも指摘している。「推奨する多元主義は、抗争的論争の部分として受容されるべき要求と、排除されるべき要求を差別する必要がある」のである。「民主的社会は、その基本的な制度を疑問視する人々を正統な対抗者とは扱うことはできない」。「あらゆる排除を克服する」と装うことでできない。「しかし排除は、道徳的にではなく、政治的に見られるべきだ」。つまり「民主的政治組織から構成された制度に挑戦する」ことから排除される（Mouffe 2005, 120－121）。もちろん「その組織自体抗争的論争の一部」であり、それが「紛争的コンセンサス」ということの意味である。しかしそうした排除の状況を回避する手立ては存在しない。その意味で「根源的かつ多元的な民主主義のプロジェクトは、政治的なるもののなかに存する闘争と敵対の次元を承認しなければならないし、還元不可能な価値の多元性がもたらす帰結を受け入れなければならない」。

「われわれに課せられた作業とは、社会関係に本来備わっている暴力と敵対性という構成要素を敬遠するのではなく、そうした攻撃的諸力を緩和し転用することのできる諸条件をまた多元主義的民主主義の秩序が可能になる諸条件を、どのようにして創出するか思考することにほかならない」。それがわれわれの出発点であると（Mouffe 1993, 152－153）。提起される問題は、「いかにして、人間関係に存在する潜在的な政治的敵対を争闘的なものに転換するか」である（Mouffe 2000, 135）、と再三にわたってムフは述べる。マッキンタイアなどの新アリストテレス主義に対して、「敵対なき多元主義、敵なき友、antagonism な

き agonism」(Mouffe 2000, 134) と批判する。彼女は、ヘゲモニーが暴力を伴うことも指摘している。すなわち、ヘゲモニー関係は、決して排除できず、倫理あるいは道徳性の言語だけでは理解できない力と暴力の要素を伴っている (Mouffe 2000, 130)。

彼女はこのように「来たるべき民主主義」を構想したが、本稿では特に「政治的なもの」を中心にし、それが開かれた政治空間を保証するという把握に焦点をあてて、その構想の一端を検討した。「縫合されない」社会という点の検討は手薄になったが、稿を改めて検討する。

註1) 政治をアゴーン的側面で捉えるのはムフだけでなく、内容は異なるものの、すでに指摘したようにアーレントやコノリーもそうである。コノリーは、例えば『アイデンティティ\差異』の「まえがき」で、その特徴として、三点指摘している。すなわち①アゴーン的民主主義は、共同体論と違い、「対抗者への敬意」を保ち、②政治的最小限主義を批判し、③デモクラシーが領土的国家に限定されることへの批判を含んでいる (Connolly 1991, x−xi)。

註2) 小野もムフの試みに批判的である。「ムフは、シュミットの政治概念である友敵関係を一種の闘技として理解しているが、それが根拠づけられた二項対立であるという点で闘技とは異なる」。(小野紀明、2002、179)。

「審議的デモクラシー」とそこからのムフ評価は篠原一『歴史政治学とデモクラシー』(2007、岩波書店)。

なおホミ・K・バーバも植民地的差異の強調という文脈で、antagonistic と agonistic という語を用いているが、両者は峻別され (バーバ 2005, 185)、前者から後者への転換という試みは否定されるだろう。

ラクラウはアガンベンを批判した際次のように述べる。「アガンベンによって定義された締め出し観念からまだ妥当なものとして残っているのは、書き込み不可能な外部性の観念であるが、それが適応する状況の範囲は、ホモ・サケルのカテゴリーのもとで包摂可能な (subsumable) ものよりも広い。アガンベンは、書き込み可能/書き込み不可能、内部/外部の問題を、その本当の普遍性のなかで見ていないと思う。事実、対抗しあう法のあいだの相互の締め出しが記述するのは、根本的な ── すなわち、ふたつの極が、双方とも下属する客観的意味として認められる超ゲームへ還元できないという意味で根本的な ── 敵対性 (antagonism) の構成的性格である」。「締め出しが相互的である場合のみ、厳密な意味で、政治的関係を持つと主張する。というのは、その場合のみ、われわれは社会的諸力間の根本的対立を、その結果、社会的絆の恒常的な交渉と再基礎づけを持つ」(Calarco and DeCaroli 2007, 15)。この主張からすると、ラクラウもムフの試みには「批判的」かもしれない。

註3) 「ヘゲモニー」、「節合」、「浮遊するシニフィアン」などの概念について、ラクラウとムフの共著『ヘゲモニーと社会主義的戦略』(翻訳『ポスト・マルクス主義と政治』) では「ヘゲモニーの系譜学」を辿り、それが何かを「正面から開示」するというよりはむしろ、それが危機に対する応答として、「グラムシとともに、この用語は、戦術的あるいは戦略的な使用を越えるような、新しいタイプの中心性」(ラクラウ+ムフ 1992、14) を獲得したと言い、同著の特に第三章でその「新しいタイプの中心性」を展開する。なお、Laclau 1996. での「浮遊するシニフィアン」の展開も参照。

「ヘゲモニー」や「節合」などの概念について、スミスの説明を上げておこう。「政治的言説は、われわれが生きている構造位置の解釈的枠組みとなろうと奮闘するとき、「自由」とか「民主主義」とかのキーとなるシニフィアンに新しい意味を与えようと企てる」。ラクラウとムフはこのような意味をめぐる奮闘が「節合」という形をとると述べた。「「浮遊するシニフィアン」、再定義に開かれている政治的観念が、新しい方法で他の観念と結びつくとき、新しい意味を与えられる。あらゆる節合は、つねに部分的である。その結果これらのシニフィアンの意味はけっして一度に固定されない。しかしながら、過去の節合の効果が弱まったときでさえ、それらは完全には失われない。すべてのシニフィアンは過去の節合の痕跡をになっている。これらの痕跡は、本質というより、デリダ的な「最小限の残りもの」に近い。…すべてのシニフィアンの痕跡の非決定的存在/現前は…それが完全には空っぽではないこと、どんな意味の割り当てにも開かれているわけではないことを意味する」。この試みについて、次のようなスミスの評価は適切だろう。すなわち節合概念でラクラウとムフはグラムシとポスト構造主義を結合した。彼らは「グラムシの歴史性の観念とデリダ的な差延の (非) 観念」に頼った (Smith 1998, 78)。もちろん「ジェンダー、人種、階級は、先−言説的に与えられはしないという意味ですべてフィクションであるが、このことは性差別主義、人種差別主義、資本主義が現実的な物質的効果を行使しないことを意味しない」(Smith 1998, 159)。

引用文献は例えば (Buttler and Spivak 2007,) のように略し、文中に頁数とともに示した。なお和訳のあるものは利用させてもらったが、改訳したものもあるので、予めお断りしておく。

バーバ 2005, ホミ・K・バーバ (本橋他訳)『文化の場所 ── ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局

Buttler and Spivak 2007, Judith Buttler and Gayatri Spivak, *Who sings the nation-state?*, Seagull.

Calarco and DeCaroli 2007, Matthew Calarco and Steven DeCaroli, *Giorgio Agamben, Sovereignty and Life*, Stanford University Press.

Connolly 2005, William Connolly, *Plurarism*, Duke University Press.

Connolly 1991, William Connolly, *Identity\Difference; Democratic Negotiations of Political Paradox*, Cornell University Press.（杉田他訳）『アイデンティティ\差異　他者性の政治学』岩波書店

ギャンブル 2002, アンドリュー・ギャンブル（内山　訳）2002『政治が終わるとき？』新曜社

Honig 1993, Bonnie Honig, *Political Theory and the Displacement of Politics*, Cornell University Press.

Howarth and et al 2000, David Howarth and Aletta J. Norval and Yannis Stavrakakis, eds., *Discourse Theory and Political*. Manchester University Press.

古賀 2007, 古賀啓太『シュミット・ルネッサンス』風行社

Laclau 1996, Ernesto Laclau, *Emancipation(s)*, Verso.

ラクラウ＋ムフ 1992, ラクラウ・ムフ（山崎カヲル他訳）『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店

Mouffe 1993, Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, Verso.（千葉他訳）『政治的なるものの再興』日本経済評論社

Mouffe 1996(a), "Democracy, Power, and the "Political" Benhabib, ed. *Contesting The Boundaries of the Political*. Princeton University Press.

Mouffe 1996(b), "Radical Democracy or Liberal Democracy?" Trend, ed. *Radical Democracy*. Routledge.

Mouffe ed. 1996(c), Chantal Mouffe ed., *Deconstruction and Pragmatism*, Routledge.（青木訳）『脱構築とプラグマティズム』法制大学出版局

Mouffe ed. 1999, Chantal Mouffe ed., *The Challenge of Carl Schmitt*., Verso.

Mouffe 2000, Chantal Mouffe, *The Democratic Paradox*, Verso.（古賀他訳）『民主主義のパラドックス』風行社

Mouffe 2005, Chantal Mouffe, *On The Political*, Routledge.

小野 2002, 小野紀明『政治哲学の起源：ハイデガー研究の視覚から』岩波書店

シュミット 1971, カール・シュミット（田中　他訳）『政治的なものの概念』第二版、未来社

Skocpol and Fiorina eds 1999, Theda Skocpol and Morris P. Fiorina, eds., *Civic Engagement in American Democracy*, Brookings Institution Press.

スコッチポル 2007, シーダ・スコッチポル（河田訳）『失われた民主主義』慶應義塾大学出版会

Smith 1998, Anna Marie Smith, *Laclau and Mouffe ; the radical democratic imaginary*, Routledge.

スズキ 2004, テッサ＝モーリス・スズキ（辛島訳）『自由を耐え忍ぶ』岩波書店